Title	ヨブ記に聴く：被災者の立場からの解釈の試み
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.52, 2012.2：164-206
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4228
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ヨブ記に聴く――被災者の立場からの解釈の試み

窪寺俊之

一　はじめに

二〇一一年三月一一日の東北地方の三陸沿岸を襲った東日本大地震、津波、原発事故によって尊い命を落とされた方がたのご冥福を祈るとともに、未曾有の被害を被った方々の上に慰めと励ましが豊かにあるようにと切に祈ります。

今回の地震と津波は想像外の被害をもたらした。毎日のテレビと新聞の報道は、この被害の大きさを伝えている。特に、原発事故による被害が想像を絶するほどの広さに及んでいることに原子力発電の恐ろしさを感じさせられた。地震発生以来、原発事故は当事者たちの懸命な努力にもかかわらず収束の見通しが立たずにいる。原発の恐ろしさや不安だけが増幅している。この原発事故が引き起こした歴史的国家的危機の成り行きは、日本は勿論、世界各国の注目するところとなっている。

一瞬の出来事が人生すべてを破壊し尽くした。想定外の津波の襲った跡には、壊れた家屋、押しつぶされた自動車、泥まみれになった家財道具や貴重品が散乱し、大きな船が陸に押し倒されて横たわっていた。その日の夜、押し流された自動車や船から流れ出たガソリンに火が付き黒煙を上げて海は火の海となっていた。それは人間の力で制御できる限界を超えるものであり、人間の無力を突きつけられる悲惨な状況であった。

自分の家のあった場所が壊滅状態になっているのを見ながら、ただ茫然と立ちすくんでいる被害者がテレビに映し出された。住み慣れた家も、思い出の詰まった品物も、貴重品も全部失ってしまった。愛する家族も隣人も一瞬のうちに流されてしまった。人々が信じていた価値感や人生観も吹き飛んでしまう出来事であった。

今回の事故は、私たちが想像しなかった規模の経済的、政治的、文化的、心理的影響を与えている。社会構造、生活スタイル、生き方、価値観を大きく変えようとしている。

このような悲惨な出来事が起きると、神仏は「何故」このような被害を防げないのかと疑問が上がってくる。[1] その神仏への反応には、いくつかあるように思われる。ある人は、神は全知全能であるが、このような自然災害の阻止は、神の権限の中にはないと言い、ある人は地震、津波は自然現象であって神仏とは関係ないと言う。ある人は、神仏などいないのだから神仏に問題を持ちかけること自体が間違っていると言う。また、ある人は今回の震災は、神仏が何かを私たちに教えようとしているのだと言う。

今回の大地震から起きた津波、原発事故のような悲惨な災害は、多くの人を不幸にし、多くの問題を私たちに投げかけているのは確かである。宗教的にどのように受け止めることができるのであろうか。この未曾有の被災者が出た災害により、私たちは宗教的信仰の在り方を問い直さざるを得ない。このように多くの人の生命が津波に飲み込まれた時、

神はどこにいたのか。また、神はこのような地震や津波を阻止できなかったのか。また、私たちの信じる神とは、どのような神なのか。宗教は未曾有の被害を負った人たちに慰め、生きる力、希望を与えられるのであろうか。

二　牧会論的視点からヨブ記のメッセージを汲み取る

過去を振り返ると、宗教は民族の崩壊時、戦争時、迫害時など生命の危機に直面した時に、人々に平和を訴え、希望や生きる力を与えてきた。また、難病や死との闘いの中で死を越える希望を与えてきた。三・一一の大災害を被った人に宗教は何を語ることができるのかが今問われている。特に、キリスト教はどんな生きたメッセージを持っているのであろうか。この論文は、今回の地震、津波、原発事故で苦しむ人の目線から、ヨブ記のメッセージを汲み取ることを目的にした。大きな災害を被った人の悲しみや苦悩の視点からヨブ記を読むことで、苦難を負った人々の心の癒しや希望を見出したいと願う。(2)

聖書には国家的、民族的、個人的危機が数多く記されている。そこでは人生の危機に出会った人たちの苦難がたくさん出てくる。(3) 危機とは、分裂、喪失を意味するが、具体的には国家崩壊、戦争、死、病気、離別などである。(4) 聖書はこの危機に直面する人間に対する神の救いを語っている。また、絶望のどん底から立ち上がる希望や光を与えてきた。この論文では、財産、家畜、雇い人、家族を一瞬に失ったヨブの人生を書いた「ヨブ記」を取り上げる。その理由は、ヨブの体験と大地震と津波の体験に共通点があると考えたからである。その共通点は次のようにまとめられる。

① 大地震と津波は突然の出来事であった。ヨブの苦難も、被災者の災難も突然襲ってきたものである。家族、雇人、家、家畜もすべて一瞬のうちに失った点で共通。

② 特別の理由なく災難が襲ってきた。ヨブの苦難も、大地震と津波の災難も被害者たちには特別の理由が見つからなかった点で共通。

③ その被害規模が想像外であった。ヨブも震災被害者も、財産、家畜、更には家族さえ失った。一切のものを失った点で共通。

④ いのちを支えていた精神的支柱（価値感など）が揺り動かされたこと。ヨブは神を信頼し、神を人生の支えにしていた。震災の被害者は、現代科学、技術、日頃の訓練などを信じていた。人間の知識や力が揺れ動いた。

このようにヨブの苦難と東日本大地震と津波被害の経験には、いくつもの共通点を見ることができる。ここではこの共通点を心に留めながら、ヨブ記の示している慰めや希望を汲み取りたいと願う。

1　牧会論的視点とは

さて、ヨブ記はいろいろの視点から読まれてきた。[5] ここでは、牧会論的視点からヨブ記のメッセージを探ってみる。ここで牧会論的視点についての説明が必要であろう。牧会論的視点の根拠は、マタイ福音書のイエスの牧会にある。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を述べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（マタイによる福音書九・三五―三六）。[6] ここにイエスの牧会の三つの特徴を見ることができる。

①「イエスは町や村を残らず回って」とあり、イエスは町や村を回って、人々の生活の場に身を置いていた。イエスは当時の社会的指導者や宗教家たちの中に身を置いていない。身分的立場、経済的余裕、社会的名声のない人たちの場に身を置いていた。牧会論的視点は、人々の生活の場から人が何に苦しみ、何を必要とし、何が生きる力になるかを考える。

②「深く憐れまれた」とあり、人々が苦しみに打ち倒されることにイエス自身が深く心を痛めた。イエス自身が心がねじられるほどに痛んで苦しむ人の体験を自分自身の体験とされた。牧会論的視点は牧会する者自身が心を痛める視点を重視する。牧会者自身が心を痛めることから見えるものを大切にする。被災者の経験に焦点を当てながら、被災者の自然の感情や希望を丁寧に扱う。

③「ありとあらゆる病気や患いをいやされた」とは、身体的病は勿論、心の苦痛を癒されたと理解できる。イエスの宣教の中心は「癒し」にあり、人生に慰めを与え、人生の目的や将来の希望を与えたと解釈できる。「癒し」とは、回復、和解、悔い改めを示す。牧会論的視点とは、人々の精神的、心理的、霊的（スピリチュアルな）痛みや苦しみを癒し、喪失した自己を回復させる。自律した人間として人生を襲う不条理な苦難と向き合える生き方を重視する。

牧会論的視点のこれ以上の説明はこの論文の目的を超えるので、ここで終わるが、以上の三つの視点からヨブ記を取り上げて、ヨブ記の本文に密着しながら本文が語るメッセージを聴き取るように努める。この拙論は聖書学の論文ではないのでテキスト本文批評などの問題には触れない。既存の『聖書　新共同訳』日本聖書協会、一九八八を使用して議論する。

2　ヨブ記の構成

ヨブ記の大筋を見てみよう。物語の構成は次のようになっている。

一・一―一・二二　ヨブの紹介、ヨブを襲う苦難とヨブの信仰告白（散文、民話）
二・一―二・一三　二回目の苦難とヨブの信仰告白（散文、民話）
三・一―三・二六　ヨブの呪い（独白、嘆き、詩文）
四・一―七・二一　ヨブとテマン人エリファズの議論一（四―五章エリファズ、六―七章ヨブの詩文）
八・一―一〇・二二　ヨブとシュア人ビルダドの議論一（八章ビルダド、九―一〇章ヨブの詩文）
一一・一―一四・二二　ヨブとナアマ人ツォファルの議論一（一一章ツォファル、一二―一四章ヨブの詩文）
一五・一―一七・一六　ヨブとテマン人エリファズの議論二（一五章エリファズ、一六―一七章ヨブの詩文）
一八・一―一九・二九　ヨブとシュア人ビルダドの議論二（一八章ビルダド、一九章ヨブの詩文）
二〇・一―二一・三四　ヨブとナアマ人ツォファルの議論二（二〇章ツォファル、二一章ヨブの詩文）
二二・一―二四・二五　ヨブとテマン人エリファズの議論三（二二章エリファズ、二三―二四章ヨブの詩文）
二五・一―二七・二三　ヨブとシュア人ビルダドの議論三（二五章ビルダド、二六―二七章ヨブの詩文）
二八・一―二八　神の知恵の讃美（詩文）
二九・一―三一・四〇　ヨブの嘆き（独白、詩文）
三二・一―三七・二四　バラクエルの子エリフのヨブ批判（詩文）（挿入部分）

三八・一―三九・三〇　主なる神の介入（詩文）
四〇・一―四二・六　ヨブと神との議論（詩文）
四二・七―一六　結び（散文、民話）

以上の構成に見るように、ヨブ記は四十二章で構成されているが、内容は散文（一・一―二・一三、四二・七―一六）と詩文（三・一―四二・六）に分かれる。[7] 散文の部分は民話が題材になっている。それがヨブ記の最初の部分（一・一―二・一三）と最後の部分（四二・七―一六）を構成して話全体の枠組みを造っている。[8] この最初の散文の部分は、信仰深いヨブが災難に遭いながらも信仰を貫き通すというテーマが中心になっている。最後の散文の部分ではヨブが失ったものを再び神の祝福として受けたとなっている。その枠組みの中に詩文が挿入されている。詩文は三章一節から四二章六節まであるが、その中の三章と二九章―三一章はヨブの独白、また、二八章は、神の知恵を賛美した箇所である。ヨブ記の中心的部分をなす詩文では、三人の友人たち（四―二七章）とエリフ（三二―三七章）が入れ替わり現れて「何故正しい人が苦しみ、悪人が栄えるのか」というテーマでヨブと議論している。[9] 本来、ヨブを慰めに来た友人たちはヨブを苦しめる結果になっている。

3　ヨブ記の著者、成立年代

ヨブ記の成立年代は諸説あるが、和田幹男は「ヨブ記の成立はバビロン捕囚期以後のペルシャ時代、おそらく紀元前五世紀前半」と言っている。[10] 人々の間で語りつがれてきた民話を題材にしながら、そこに人の常である苦難の問題を絡ませた信仰書になっている。旧約聖書では知恵文学の範疇に加えられている。詩文の切迫した内容から推察すると、著

者は一般論として苦難の問題を議論しているのではなく、自らも苦難に悩み苦しんだ個人経験があると想像できる。特に神の民ユダヤ民族が異民族によって滅ぼされるという歴史的状況（バビロン捕囚経験など）と著者の苦難の体験とが重なっていると推察できる。当時ユダヤ教で信仰上応報思想が広まっていたことに賛同できず、ヨブ記記者は信仰者が必ずしも幸福になる訳ではないと主張している。[11] ヨブ記の著者や成立年代については、これ以上の議論はこの論文の中心テーマから離れるので、これ以上は扱わない。

三　ヨブという人物と苦難

1　ヨブとはどんな人物か

ヨブ記一章一―五節に、彼の人物と生活の模様が記される。「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた」[12] とヨブの人物像（一・一）が明らかにされる。「七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった」（一・二―三）とヨブが宗教的に正しく経済的にも非常に豊かであったと記す。そして、「息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた」（一・四）（生活の様子）とヨブが子供たちからも尊敬され丁重に扱われていたことが記される。また、「ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。」（一・五）（信仰生活）とヨブの信仰者として正しい生き方をし、かつ家族のためにいけにえを捧げていたと書かれている。このように経済的にも、社会的にも、家庭的にも大変恵まれ、かつ神から「地上に彼ほどの者は

いまい」（一・八）と言われている。[13]

2　ヨブの人生に何が起きたのか

ある日、突然、ヨブを大災害が襲う（一・一三―一九）。「シェバ人が襲いかかり、略奪していきました。牧童たちは切り殺され」（一・一四）、「天から神の火が降って、羊も羊飼いも焼け死んでしまいました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました」（一・一六）、「カルデア人が三部隊に分かれてらくだの群れを襲い、奪っていきました。牧童たちは切り殺され、わたしひとり逃げ延びて参りました」（一・一七）とあるように、略奪者の攻撃を受け、長男を含めて一〇人の子供たちも、雇人も、牛、ろば、らくだもすべて殺されてしまった。今日の計算では数億円の経済的被害と家庭を壊された精神的ダメージは計り知れない。それに加えて「天から神の火が降って」とあるように自然災害があり、「若い方々は死んでしまわれました」（一・一九）。ヨブの全人生を壊滅させる被害です。人生の大ピンチに陥った。

更に追い打ちを駆けるように、二回目の災難が襲ってくる（二・四―一〇）。主の許可を受けたサタンは再びヨブに苦難を与える。「サタンはヨブに手を下し、頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった」（二・七―八）とあるように、ひどい皮膚病はヨブを苦しめる。ヨブ自身が重い皮膚病に襲われたことで、ヨブは人生を立て直す機会を失ったと言えるだろう。財産や家族を失い、子供たちを失った上に、自分自身の健康を失う悲劇に見舞われた。

3　苦難をどう受け止めたか

それではヨブはこの苦難をどう受け止めてどう対応したのであろうか。略奪者や自然災害に襲われた時、ヨブは身を守るために軍備増強や防災対策強化などをしたであろうか。否である。ヨブは上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝して「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主が与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（一・二一）と言って神を讃えた。ヨブは災難を受け、多くのものを失ったにもかかわらず、自分を失わず、神への奉仕に努めた。ヨブは神の前に無力な自分を認めて、神にすべてを委ねた。

しかし、ヨブの災難はそれだけでは終わらない。二回目の災害でヨブ自身が重い皮膚病に罹った。「ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった」というほどの苦しみを負った。その時、ヨブの妻はヨブを非難して「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬほうがましでしょう」（二・九）と言う。ヨブの妻は夫の苦しむ姿を見て耐えられなくなったのかもしれない。この時ヨブはどのように対応したか。ヨブは「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか」（二・一〇）と言って、妻を叱りつけて決して神を呪わず、神への従順を決意した。ヨブは妻から馬鹿な信仰者に見られながらも神への信仰を守り続けた。

4　ヨブの内的葛藤

ヨブは、妻には神への信仰を表明したが、内面では心は動揺し苦悩した。詩文で書かれた三人の友人（テマン人エリ

ファズ、ナアマ人ツォファル、シュア人ビルダド）との議論が、ヨブの心の苦悩や葛藤を表している。ヨブの嘆きが次のように記されている。

①「わたしの生まれた日は消え失せよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。その日は闇となれ。神が上から顧みることなく、光もこれを輝かすな」（三・三―四）、「なぜ、わたしは母の胎にいるうちに死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか」（三・一一―一二）と自分が生まれたことを呪っている。襲ってきた災難と苦痛の厳しさはヨブの忍耐の限界を超えた。逃避できない現実を前にして出生を望まなかったと嘆いる。生まれてこなければよかったと現実の厳しさを表明している。

②「全能者の矢に射抜かれ、わたしの霊はその毒を吸う。神はわたしに対して脅迫の陣を敷かれた」（六・四）、「手ずから造られたこのわたしを虐げ退けて、あなたに背く者のたくらみには光を当てられる。それでいいのでしょうか」（一〇・三）。全能者がヨブを助けずにかえって虐げ苦しめていると嘆く。そして神に背く者に光をもたらしていると言って、ヨブは真っ正面から神に不平を言い、神の裁きの不公平さを訴え、神の無慈悲さに怒りを投げかけている。ここには信仰深いヨブはなく、ヨブは神の敵対者になっている。

更に「このように、人間ともいえないような者だが、わたしはなお、あの方に言い返したい。あの方と共に裁きの座に坐ることができるなら……その時には、あの方の怒りに脅やかされることなく、恐れることなくわたしは宣言するだろう。わたしは正当に扱われていない、と」（九・三二、三四―三五）と述べている。これは「裁きの座」とあるように法廷の場面が想定されている。ヨブは被告人として訴えられている。告訴人は神である。法廷では被告人にも弁論の機会が与えられる。にもかかわらず、ヨブにはその機会さえなく裁かれ苦痛だけ負わされていると訴える。ヨブは弁論

の機会も与えられず、神の強権的裁きに従わせようとする神の不公平さと神への怒りを述べている。

また、「神は髪の毛一筋ほどのことでわたしを傷つけ、理由もなくわたしに傷を加えられる。息つく暇も与えず、苦しみに苦しみを加えられる」（九・一七―一八）とここでも神は公正でないと訴える。ヨブの苦難は神が誤った判断する悪い裁判官だと訴える抗議文になっている。

③「わたしの魂は息を奪われることを願い、骨にとどまるよりも死を選ぶ。もうたくさんだ、いつまでも生きていたくない。ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです」（七・一五―一六）では、信頼していた神から見放されてしまった自分の人生には、期待するものはなく空しいと諦めを語り、神との関係を断ち切りたいと願っている。[14]

④ 最後には、自分の身の潔白を独白する（三一・一―四〇）。「わたしがむなしいものと共に歩き、この足が欺きの道を急いだことは、決してない」（三一・五）と語る。もしも自分に誤りや愛に欠けることや、異教の神に礼拝することがあったなら、自分の子供も、妻も、収穫物を失い、自分は障害者になってもよいと語っている。自分の身の潔白を示すために「決してない」と一四回も繰り返している。[15] このように「決してない」と繰り返すことで神からも見放されたヨブは、自己の正当性を神にも自分に言い聞かせている。そうすることでしか自分を保てなかったと解釈できる。[16] そして、最後には、ヨブ記は「ヨブは語り尽くした」（三一・四〇b）と結んでいる。ここにはこれ以上訴えるものがないほどに訴えたが、それさえ無意味だと感じたヨブの諦めが見える。

5　ヨブと友人との対話（何故、正しい人が苦しみ、悪い人が栄えるのか）

ヨブの苦しみが激しいのを見たヨブの友人たちがヨブに近づいて慰めようとした。この友人たちは、ヨブの苦難はヨブが罪を犯した罰だと考えて、ヨブに神への悔い改めを迫る。テマン人エリファズは「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が絶たれたことがあるかどうか」[17]（四・七）と言う。シュア人ビルダドは「神が裁きを曲げられるだろうか全能者が正義を曲がられるだろうか。あなたの子らが神に対して過ちを犯したからこそ、彼らをその罪の手にゆだねられたのだ」[18]（八・三―四）と言う。ナアマ人ツォファルは「神は偽る者を知っておられる。悪を見て、放置されることはない。生まれたときには人間もろばの子のようなものだ。しかし、愚かな者も賢くなれる」[19]（一一・一一―一二）と言う。

このようにヨブの三人の友人たちは次から次にやって来て、ヨブに自分や子供の罪を認めて、悔い改めて神の赦しを得るように迫る。ヨブは友人たちの考えに同意できない。三人の友人たちはヨブを慰めに来たのに、結果的にはヨブの生き方を責め、反省と悔い改めを強要する。そしてヨブに呪いの言葉を浴びせる。「彼は神に手向かい全能者に対して傲慢にふるまい、厚い盾をかざして頑に神に向かって突進した。顔は脂ぎって腰にはぜい肉がついていたが、滅ぼされた町、無人となった家、瓦礫となる運命にある所に、彼は住まねばならないであろう」[20]（一五・二五―二八）と述べる。しかし、友人たちの厳しい追及にもかかわらず、ヨブは神の不公平さ、神の無慈悲さを攻撃して自分の正当性を主張する。そして、ついにヨブは友人たちに「そんなことを聞くのはもうたくさんだ。あなたたちは皆、慰める振りをして苦しめる」（一六・二）と言い、「どこまであなたたちはわたしの魂を苦しめ、言葉をもってわたしを打ち砕くのか。侮辱はもうこれで十分だ。わたしを虐げて恥ずかしくないのか」（一九・二―三）とヨブは友人たちに非難を浴びせている。

ヨブと三人の友人たちの対話は互いに非難し、攻撃し合うことで終わる。そこには立場の違いが明らかになっている。三人の友人たちはユダヤ教正統主義が語る応報思想に立っているが、ヨブはそれに反対の立場にある。ユダヤ教正統主義は、理由なく傷ついた人の傷を深めることはあっても、慰めや励ましにはならないことを語っている。むしろ、傷を持つ人を助けるには、傷ついた者の心（心情）の痛みに寄り添い、支え、労りの心を持つことが重要だということである。

四　ヨブ記が問いかけるもの

以上、ヨブ記のあらすじとヨブの人物像、ヨブに降りかかった災難とヨブの内的葛藤、ヨブの友人たちとの対話に触れた。ここではヨブ記が私たちに投げかけている問題について考えてみよう。ここでは四つの問いを取り上げ、その解答をヨブ記に探ってみよう。

1　苦難の始まりと信仰の揺らぎ

ヨブの苦難の始まりが一―二章に記されている。天上の会議にサタンもやって来て主と会う。[21] 主はサタンに、ヨブは「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」（一・八b）とほめる。サタンは主の言葉に反対して、主からヨブを試す許可を貰う。主はサタンに「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい」（一・一二）

と言われた。ヨブに災難が襲い牧童は殺され、天災で家畜も子供も死んでしまった。それでもヨブは神を非難しない。主は再びサタンに会い、ヨブは「無垢な正しい人で神を畏れ悪を避けて生きている」と言う。サタンはまた神から許可を貰い、ヨブに皮膚病の苦難を与える。今度はヨブ自身がひどい皮膚病にかかり灰の中に座り、体中を掻きむしるほどの苦しみに遭った。このようにヨブの悲惨な生涯は、主がサタンに言った「それでは彼をお前のいいようにするがよい」（一・一二、二・六）[22] という許可に原因がある。

この言葉は私たちに疑問を起こさせる。何故、このような許可を神は出したのか。神はヨブの信仰は神ご自身を神として崇める信仰であることを示そうとしたのであろうか。[23] それに対して、サタンはヨブの信仰は御利益的信仰だと主張したかったのか。どちらが正しい賭けであろうか。[24] このようなサタンとの賭けをする主の対応に疑問を持つ。そのいくつかの疑問を上げてみよう。

① 「お前のいいようにするがよい」は、神がサタンの思いのままにヨブを任せたように映る。サタンの言葉「あなたを呪うにちがいありません」（一・一一、二・五）は、ヨブを神から引き離し、反逆者にしようとした悪意の言葉と解釈できる。そして、神はサタンの悪意に満ちた魂胆をご存知だったようだ。「お前は理由もなく、わたしを唆して」（二・三）とある。サタンの魂胆を知りながらヨブが苦しむのを許す神の真意はどこにあるのか疑問である。ヨブが苦しむのを神は喜んでいると映るし、サタンの要求を受け入れた神はサタンに負けたとさえ見える。

② 神とサタンのやり取りは、ヨブの利益にはまったくなっていない。ヨブの言葉「神は悪を行う者にわたしを引き渡し、神に逆らう者の手に任せられた。平穏に暮らしていたわたしを神は打ち砕き、首を押さえて打ち据え、的

として立て、弓を射る者に包囲させられた。彼らは容赦なく、わたしのはらわたを射抜き、胆汁は地に流れ出た[25]」（一六・一一―一三）と、ヨブは自分が受けた苦痛の激しさを語っている。平穏に暮らしていた生活が突然打ち壊され、有無を言わさず押さえつけて敵の標的として腸まで射抜かれたとある。ヨブには神が敵の味方になって自分を苦しめていると映ったのだ。それは守護者としての神が責任を放棄し、サタンの好き勝手に任せた無責任な態度にさえ映る。

「お前のいいようにしてみるがよい」（一・一二、二・六）は、このような疑問を引き起こす表現である。この言葉は何を意味しているのであろう。また、私たちに何が問われているのであろうか。

この表現では、ヨブの苦難が大きかっただけに神の無責任さが浮かび上がってくる。愛なる神はいないとさえヨブには思えた。無垢な人で神を畏れ、悪を避けている忠実な僕であるヨブでさえ、苦難が襲ってきて全てのものを失った時には、神の存在も神の愛も信じられなくなることさえあると語っていると解釈できる。

このような解釈は、信仰の在り方を柔軟にする。信仰者だから信仰が揺らがないのではなく、揺らぐことがあり、神の存在も愛も信じられないことがある。信仰を柔軟に考えることは、硬直した信仰で自分を縛ってしまうことから解放する。硬直した信仰は信仰が揺すぶられることを善としない。弱さや脆さを持つ人間であることを認めることを困難にする。信仰が揺らぎ神の愛に疑問を持つことを罪と考え、自責の念を持って苦しむ。弱さの故に神の存在や愛を疑うことは、当然のことである。神から見捨てられたと感じて孤独になり、苛立、怒り出すことも自然なことである。

もう一つ心に留めておくべきことは、「お前のいいようにしてみるがよい」の後の「ただし彼には手を出すな」（一・一二）と「ただし、命だけは奪うな」（二・六b）という言葉である。ここにはヨブに対する神の手の守りが与

えられている。サタンに限度を与えてヨブの生命を守っている。このような限度の中でしかサタンは行動できなかったということは、ヨブの生命は神が責任を持っていることを示している。つまり、ヨブが一時は神の存在や神の愛を疑うことはあっても、ヨブを神は見捨てずに一緒にいて立ち直ることを待ってくださることを伝えようとする。そこには、一旦救いに入れられた人は神がご自身の約束を守り通してくださるという新約聖書に通じる教え（ローマ八・三一―三九）が見える。

今回の大震災と津波は、私たちの信仰を揺り動かした。信仰を失うほどの打撃を受けた。それは私の信仰が揺れ動いたから神の恵みから落ちてしまったのではない。神は神ご自身のために御約束を守り通してくださる。

2　神への不信仰者、反抗者、攻撃者では悪いのか

この後に続く詩文でヨブは、「わたしのようなものがどうして神に答え、神に対して言うべき言葉を選び出せよう。わたしの方が正しくても、答えることはできず、わたしを裁く方に憐れみを乞うだけだ」（九・一四―一五）と述べ、ヨブの主張や訴えが神に無視されてしまう悲しみを訴えている。また、「罪もないのに突然、鞭打たれ、殺される人の絶望を神は嘲笑う。この地は神に逆らう者の手にゆだねられている」（九・二三―二四a）と述べ、また、「あなたの心に隠しておられたことが、今、わたしに分かりました。もし過ちを犯そうものなら、あなたはそのわたしに目をつけ、悪から清めてはくださらないのです。逆らおうものなら、わたしは災いを受け、正しくても、頭を上げることはできず、辱めに飽き、苦しみを見ています。わたしが頭をもたげようものなら、あなたは獅子のように襲いかかり、繰り返し、わたしを圧倒し、わたしに対して次々と証人を繰り出し、いよいよ激しく怒り、新たな苦役をわたしに課せられま

す」（一〇・一三―一七）と述べて、ヨブに辛くする神への不満、そして、悩み苦しむヨブを無視する神に激しく抗議している。

引用した箇所を見る限り、ヨブは必ずしも苦難を甘んじて受け入れる忠実な信仰者ではない。ヨブを繰り返し襲う悲劇は神への信頼を失わせる。築いてきた財産、幸福な家庭、健全な健康が失われると、神への攻撃者に変わったヨブの姿には、サタンが指摘したようにヨブの信仰は御利益的信仰と全く無関係だとは言い切れないところもある。[26]

ヨブ記はヨブを敢えて神への不信仰者、攻撃者、反抗者として表現しているのだが、その理由は何であろうか。ヨブ記記者は、何故、このような表現をしたのであろうか。どこに記者の意図があったのか。多くの注解者はヨブが不信仰者、攻撃者、反抗者になった積極的意味を見つけ出そうとはしていない。しかし、ヨブがここまで怒り神に応答を求めた理由は何だったのだろう。そして、ヨブをこのように描いた記者の意図は何だったのであろうか。

① ヨブ記記者はヨブを神への不信仰者、攻撃者、反抗者として描くことで人間のあるがまの姿を描き出そうとしたのだと解釈できる。

人は不条理な事に出会うと「何故か」、「神の愛はどこにあるのか」と疑問を持つ。しかし、信仰者は「神はどこにいるのか」「何故、神は助けてくださらないのか」と一時は問うても、神を疑問視することを恐れたり自分が不信仰になることを心配して、神の計画は人間には量り知れないと自分に言い聞かせることで決着しようとする。神の絶対性や愛の本質に疑問を持つことを恐れて、今は苦しみの意味は理解できなくてもいつかは分かる筈だと自分に言い聞かせる。そして、唯、神を信頼することが重要だと受け止める。そこで疑問を未解決のままにして信仰で受け止めようと努力す

る。

② しかしながら、ヨブ記は神にも自分にも正直であることの大切さを勧めていると解釈できる。人生に起きる苦難や難問を抱えて、戸惑い、悩み苦しみ、怒ることは、当然だと教えている。人生の苦難に悩み苦しみつつも忠実な信仰者のように振る舞うことを神は望んでいないのであろう。

所謂よい信仰者でありたいと願う者は、自分自身に襲ってくる悲劇や苦難にも必ず神のご計画があると自分を納得させようとする。信仰とは喜びも悲しみも神のご計画だと信ずることだと理解する。そのために否定的感情（不信、懐疑、不満、悔しさ、反抗心、攻撃心など）を無理矢理に抑圧して心の底に仕舞い込んでしまう。その結果、外見的には悟り切ったように見えるが、内面的には割り切れない感情を抱え込むことになる。これは真の感情を押し殺す偽善であり不健全な態度である。

ヨブ記は最も大切なものを失った時、否定的感情が起きることは当然だと教えていると解釈できる。自分に納得できないことには、疑問が湧いてくるし、理由を明らかにしたいと願う。その疑問よって硬直化した信仰は再生し、改新されていく。

そのことは、今回の震災で掛け替えのないものを奪われた人は、その怒りや悔しさを神にぶちまけることが許されていると解釈できる。愛する者、一番大切なものを無惨に奪われた人こそ、神に向かって怒りや悔しさを訴えてよいとヨブ記は言っていると解釈できる。ヨブ自身が現実の厳しさと苦悩を味わい、神への反逆者になったことを描きながら、不条理な現実と向き合わねばならない人たちに自分に真っすぐで善いと、慰めと励ましを与えようとしたと解釈できる。そこから生きた神への問いが生まれてくるからである。信仰が固定化し、硬直化すると信仰は人々の生活から乖離し、古い教義にしがみつき、教条主義に陥る。ヨブ記はその危険性を破ろうとしたのである。[27]

③ ヨブ記は、人間の怒りや悔しさの感情の積極的意味を深く理解していると解釈できる。実は、怒りや悔しさの中に、

苦難に満ちた人生を生きるための原始的生命力が隠れていることをヨブ記は示していると解釈できる。

人間の原始的生命力は怒りや悔しさの感情の中にある。つまり、怒りや悔しさの感情が湧くことで不条理な現実と向き合うことができるのである。ヨブが経験した怒りや悔しさは、生きることを脅かされたことから引き出された潜在的生命力の発露である。生の脅かしから来る怒りや悔しさは、人間の最も深い生命力を生起させる。納得できない破壊の現実には、人はただ、怒ること、悔しがることで向き合う。人は生きる為の力を怒りや悔しさという形で表現するのである。

倫理的面から見れば、怒りや悔しさの感情を表出することは消極的評価を受ける。また、宗教的に言えば、怒りや悔しさを訴えることは神への不信仰になる。しかし、ヨブ記の人間観はこのような感情に人間の根源的生命力があると語っている。怒りや悔しさの感情は喜びの感情よりもっと深い生命の根源に触れるものである。そのような感情を持つことが、危機の中でも生きる反発力となることを教えていると解釈できる。

3　ヨブの苦難の原因はどこにあるのか

ヨブ記はヨブの苦難の理由は分かっているのであろうか。ヨブ記はヨブを悩ました「何故、自分は苦しまなければならなかったのか」の理由は明らかにしないままで終わっている。ヨブの苦難は略奪者の襲撃、自然災害、重い皮膚病であった。このような苦難はしばしば思いがけない時に、特定の理由がないまま襲ってくる。もちろんこのような災害からの被害を最小限にすることは、人間の力でできるだろう。しかし、究極的に人と人との争いや自然災害や重い病気を根絶することは不可能である。そして、苦難の根源を根絶することが不可能であれば、必ず苦痛を負う人たちが出るし、「何故か」という問いは起きてくる。

ヨブ記は人間存在と災難は一体にあることを表現していると解釈できる。ヨブ記の語るヨブの苦難は偶然的なことではなく、人間存在が常に脅かされている現実であることに気付かせようとしたのである。つまり、人間自体がこのような暴力的破壊的危険にさらされている存在だと教えていると解釈できる。神とサタンが対話したところは、「主の前に神の使いたちが集まり」（一・六）と書かれていて、天上の法廷だったと記している。[28] それは人間の力や思いが働く場所ではないことを示唆しているようだ。つまり、人間ヨブの理解を越えたところで、ヨブの苦難は決定されたと解釈できる。だから、ヨブの災難の原因は分からないと言っているように解釈できる。

今回の大震災や津波が何故起きたのか神に問うても、神は答えられないであろう。[29] 神が私たちの信仰を試すために起こしたものではない。まして、正しい人と悪い人を分けるためなどではない。生き残った人が正しいわけでもないし、亡くなった人が悪い人だったわけでもない。死んだ人たちの無念さ、悔しさは私たちの心にいつまでも傷となって残る。生き残った者は、この悲惨な経験を生かす責任を負っていることは確かである。無惨にも亡くなった人たちの叫びや悲しみをしっかりと受け止めて記憶の中に留めておくことが弔いになると思う。私たちの記憶の中で死者を想起することで、死者が生き続けることになる。ヨブ記はヨブの苦難の原因については沈黙したままである。

4　苦難の解決はどこから来るか

ここまで、ヨブの苦難の始まりや原因、そしてヨブの葛藤を見てきた。ではヨブが抱えた問いは解決されたのであろうか。残念ながらヨブ記を最後まで読んでみても「何故正しい人が苦しまなくてはならないのか」という問いの答えは見当たらない。[30] 未解決であることは、この問いを私たちが自ら考え続けることを求めているのかもしれない。ヨブ記で

は解答されないまま、嵐の中から神様の突然の介入（三八・一）によって新しい局面に入っていく。[31]

三八章からの新しい場面では、嵐の中から神が語りかける。そこでは神の創造の業、神の自然支配、自然界の生き物への神の摂理が語られる。そして、ヨブの信仰への回帰で結ばれている。「わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう」（四〇・四）は、ヨブの「悔い改め」の言葉である。それは過去の言動を悔いて、新たな方向への出発を宣言するものである。神の突然の危機介入によって応報思想は悔い改めの思想に転換した。「わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました」（四二・三c）。「あげつらう」は出来事についていろいろと不平不満を言うことである。ヨブは自分の言行を悔い改めて、神の偉大さを認める生き方へと決断した。「わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」（四二・六）。この「悔い改め」は生き方の転換であるが、そこから真の生きる力や希望は来ることを語っている。

以上の記事から分かることは、ヨブ記は真の生きる力や希望は自分自身では得られなかったと言っているように解釈できる。ヨブと三人の友人たちの議論が長々と記されているのは、人間の努力では解決を見出せなかったことを示していると解釈できる。結局、神の介入によって初めて、「何故、正しい人が苦しむのか」という議論から解放された。そして、「わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう」（四〇・四）と悔い改めた。更に、「あなたのことを、耳にしておりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」（四二・五）と告白する。このような突然の神の介入は神との人格的出会いをもたらした。神との人格的出会いが苦難の解決だとヨブ記は語っている。

五　ヨブ記に聴く

今まで述べたように、ヨブ記はいくつもの問いを投げかけながら、人生に伴う不条理な出来事との向かい合い方を語っている。先日の三・一一の大地震、津波の災害、原発事故の被害を受けた者や不条理と言える災難に遭って苦しみを味わっている人へのメッセージが記されていると言える。勿論、今回の大地震、津波、原発事故はその被害の大きさ、深刻さは計り知れないもので、外部の人には到底理解できないであろう。だから外部者は簡単に扱うことは慎まなくてはいけないであろう。そのことを心に留めながら、ヨブ記に聴くことにしたいと思う。

1　応報思想の否定

ヨブ記の語っている一つは、幸福な人、信仰深い人、正しい人にも突然の災難が襲ってくる事実を語っていると解釈できる。ヨブは人々の模範になる生活をし、かつ、神の祝福を受けるに相応しい生き方をしていた。ヨブ記の書かれたユダヤ社会には、神との契約の民としての意識が強くあった。選びの民はアブラハムに与えられた祝福（創世記一二・一―三）を契約を守ることで得ることができると考えた。契約の遵守（神殿礼拝と律法遵守）という教えは、遵守＝祝福という教条主義となって誤った応報思想に繋がっていく。[32]

ヨブ記の思想はこのユダヤ教の教条的応報思想とは相反するものである。愛なる絶対者なる神を信仰していたヨブにも災いは襲ってきたと語っている。教条的因果応報思想ではヨブの苦難の問題は解決できないことをヨブ記記者は語っ

ている。実際、ヨブ記の書かれた時代には応報思想が広まっていたようである。[33] この思想には限界があることに気付いていたのがヨブ記記者である。ヨブ記記者はその思想の限界に気付いて、それを超える思想を見つけ出す格闘をしたのである。

教条的応報思想は人間の幸不幸を考えるためには単純化しすぎている。確かに分かりやすいので、信仰者の心の中に深く入り込んでいる。注目すべきことは、教条的応報思想にとらわれて信仰者自身が苦しむことである。不幸が襲ってくると自分の信仰の足りなさを悔いて自責の念にとらわれる。信仰が足りないから不幸が襲ったと。このような個人的レベルの問題だけではない。この応報思想は信仰共同体の中に亀裂を引き起こす危険性を持っている。[34] 不幸を負った人は自分の罪の報いを受けているのだから当然苦しむのは当たり前という思想を生んでいく。[35] 因果応報思想が人を裁く道具になる。これは、苦しみを負いつつ助け合う共同体を作る役には立たない。

今回の大地震と津波で信仰者も命を失ったことであろう。また、愛する人を失った信仰者もいるであろう。自分の信仰の足りなさを嘆いている人もいるかもしれない。ヨブ記は今回の災害や苦難は信仰の足りなさとは無関係だと教えている。

2　人生は危機を包み込んでいる（苦難の原因、理由）

人は知識や情報を集め、叡智を集めて人間の世界を築いてきた。より安全で安心できる社会を求めてきた。そのために科学技術を発展させ、それに頼ってきた。「備えあれば憂いなし」という諺があるように、準備があれば万一の事態が起きても後悔しないと言う。このような考え方は、予測不可能性を持つ人生に対する楽観論である。

ヨブ記はこの世界は世界自体が無惨に消え失せる危険（リスク）を持っていることに気付かせてくれる。過去の歴史を振り返ると、人間は自然災害から生命を守るために気象学や治水技術を生み出した。病から生命を守るために医学が発達した。それでもなお、自然の暴威から完全には家や生命を守ることは不可能である。人間は科学技術の発展や医学の進歩を過信しやすいものである。科学や医学が発達すれば、これで安心だと思うかもしれない。科学や医学が安全神話を生み出している。そして、自然の破壊力の大きさや人間の限界を見えなくしてしまう。

しかし、ヨブ記は、ヨブが築いた財産、名声、評判も、一瞬に消えてしまうと教えている。人間の生命は危機にさらされていることを忘れないようにと、警告を与えているように思われる。ヨブの人生は、喪失、挫折、別離、死、消滅を抱え込んだ人生だったのである。それが私たちの人生の「現実」であることに目覚めるようにと警告している。非常に冷静な目を持って人生の現実に向き合うことを教えているようである。

冷静な目を持っていれば、災難が襲ってきた時に、慌てず、絶望せずに、災害の現実に向き合い、解決への道を探る力を得ることができるからである。自然災害を忘れた社会は、災害が襲ってすべてを失った時、災害に向き合うことさえできない絶望に陥るであろう。ヨブ記は人生には想定外のことが起きるのが当たり前であること、そして悲劇が起きた時に絶望してしまわないように冷静な目で現実を見て対応するように教えている。それは、人生を甘く見ることではなく、人生が自然や宇宙の中で営まれている小さな存在であることを再確認させている。

3　原因追及は被災者の最終的救い（生きる力）にならない

先に触れたように、ヨブ記の詩文は三人の友人たちとエリフの対話で苦難の原因追及に関心が集中している。そして苦難の原因追及はヨブ自身をますます苦しめてしまった。

三八章以降は神が直接ヨブに語りかけている。「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった」（三八・一）とあって、突然、神が直接ヨブに語りかける。今までの友人たちとの議論は中途で切られている。ヨブ記記者が敢えてこのような議論の終わり方をしたことには、どのような意図があったのか。以下のような解釈が可能である。

① 一つの解釈は、何故、正しい人が苦しむのかと議論すること自体に限界があるということである。災難の原因を追及して原因が見つかったとしても、被災者はその原因説明に納得することは非常に困難である。新たな疑問が浮び上がってくる。残念ながら、いくら原因説明されても心の傷は癒されない。心の傷は「失ったもの」が戻ってくるか、あるいは愛で癒されるしかない。ヨブ記記者が終わりのない原因追及を突然止めた理由は、原因追及以外に本質的な癒しがあることを教えようとしたのだと解釈できる。[36] ヨブの心を癒す鍵は神との出会いだとヨブ記は語ろうとしている。

② 第二の解釈は、神の突然の介入は観念論的原因追及（ユダヤ教正統主義による正義論）を打ち切って、ヨブ自身に関心を向けているということである。ヨブは自分に降りかかった災難の原因追及に集中していた。ところが、神の介入によってヨブ自身が神と向き合うことになるのである。不条理な災害で負った心の傷は観念的議論では癒されなかった。観念論的議論は「言葉を重ねて神の経綸を暗くする」（三八・二）ものだと神は非難している。神ご自身とヨブが直接人格的出会いをすることこそ癒しの道だと語っていると解釈できる。それは観念論的議論から実存的出会いへの移行と言える。このような神の突然の介入は、神との実存的出会いをもたらすものである。「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」[37]（四二・五）は、神との出会いの生きた体験を示している。神ご自身をヨブ自身の体験として知ったのである。人間を超える方、自然を支配し、猛獣を支配下におさめる方として目が開かれた。それは別の言い方では、実存的出会いによる神への信仰の回復であるし、ヨブ自身が神の中に生きる

力、再生の力を見出したと解釈できる。

このような神を体験するには、災害の原因追及ではなく、被災者自身が神との出会いへの選択をする必要性を指摘しているように見える。このような選択が、被災の現実を見ながらも、自分が立ち上がる力を得る道になるのである。

今回の被災者が大地震や津波で失ったものはあまりに大きすぎる。目前の被災の厳しさとしっかりと向き合いつつ、未来に向かって生きるには、被災者の心に生きる力や希望が必要である。そして、その生きる力や希望を得るには、神を生きた力として体験する必要があったと解釈できる。生きて働く神への信仰が被災で打ちのめされた魂を癒し、立ち上がる力を与えると教えていると解釈できる。

4　怒り狂うヨブに目を注ぐ神

ヨブ記の中心は四人の友たちとの議論である。ヨブは神に反抗し、攻撃し、自暴自棄になっている。その最終段階では「どうか、わたしの言うことを聞いてください。見よ、わたしはここに署名する。全能者よ、答えてください。わたしと争う者が書いた告訴状をわたしはしかと肩に担い、冠のようにした頭に結び付けよう」（三一・三五―三六a）と述べて、神との対決姿勢をとっている。ヨブの最後の手段は法的判断に訴えて自分の意見を聞いてもらうことであった[38]。ここにはヨブが悲嘆と怒りを持って行く最終の場が記されている。

「わたしはここに署名する。全能者よ、答えてください」は、法廷への訴えであるが、その訴えが理解されるかどうか分からない不安と一抹の諦めが見える。ヨブは法廷の判断に委ねて、語ることを終える。「ヨブは語り尽くした」

（三一・四〇b）とある。[39] そして、ついにヨブは力尽きてしまう。新共同訳は「語り尽くした」と訳している。この言葉には少なくとも二つの解釈が可能である。「語り尽くした」とは語るべきことはすべて語り尽くしたと解釈できる。これ以上は語ることがないという意味である。もう一つは、「語る力」が尽きてしまったとも解釈可能である。すべての力を振り絞って語り尽くしたので、これ以上の力はないという意味である。この第二の解釈では、これ以上闘う気力を失い、諦めの状況になったと解釈できる。この時がヨブにとっての本当の危機である。

5　絶対的危機への神の介入

ここでヨブを襲った危機に触れよう。ヨブは少なくとも三つの危機を体験している。それぞれの危機はヨブの生活や人生や生き方を覆した。

ヨブの危機がどのようなものだったかを見てみよう。

① まず第一は、ヨブが財産や家族、友人たちを失ったことである。牛は略奪され、牧童は切り殺され、家は倒れ、若者たちは死んでしまった（一―二章）。ヨブは家族、財産や、生活を支える経済的基盤をすべて失った。また、友人たちとの関係も崩れてしまう。「そんなことを聞くのはもうたくさんだ。あなたたちは皆、慰める振りをして苦しめる」（一六・二）とヨブは友人の偽りの親切を非難している。ヨブは親しい友人を失った。

② 次の危機は、神から見放されたと感じ、神への怒りをぶちまけた時であった。言い換えるとヨブの人生を内的に支えていた神から見放されたと感じた危機である。

「全能者の矢に射抜かれ、わたしの霊はその毒を吸う」（六・四）。「わたしにはもはや助けとなるものはない。力も奪

い去られてしまった」（六・一三）。「神よ、わたしはあなたに向って叫んでいるのに、あなたはお答えにならない。御前に立っているのに、あなたは御覧にならない。あなたは冷酷になり、御手の力をもってわたしに怒りを表される。わたしを吹き上げ、風に乗せ、風のうなりの中でほんろうなさる。わたしは知っている。あなたはわたしを死の国へ、すべての命あるものがやがて集められる家へ、連れ戻そうとなさっているのだ」（三〇・二〇―二三）。

ヨブの人生の土台である神との信頼関係が壊れてしまった。ヨブは神に適切に扱われていないと怒っている。

③ そして第三は、ヨブが財産も家族もすべてを失い尽くして、遂に自分自身を失った危機である。二九―三一章には、ヨブの嘆きが独白の形で書かれている。ヨブは神からも友人たちからも見捨てられて孤独の中で嘆く。その嘆きは、ヨブの過去、現在、未来を失った内容になっている。

過去の喪失「どうか、過ぎた年月を返してくれ、神に守られていたあの日々」（二九・二）。

現在の喪失「今は、わたしより若い者らがわたしを嘲笑う」（三〇・一）。

未来の喪失「死の破滅がわたしを襲い、わたしの力は風に吹きさらわれ、わたしの救いは雲のように消え去った。もはや、わたしは息も絶えんばかり、苦しみの日々がわたしを捕えた」（三〇・一五―一六）。

この危機は身体的生命と精神的・霊的いのちの両方を失った危機である。この時、神に訴える気力さえ失い、自分を保つ怒りさえ失ってしまった。この危機は、神に無関心になり、怒りも消え失せる絶対的危機である。ヨブの感情も意志も消え尽くしている。生きる意志も力もなく、自分を諦めたのである。神や友人と議論した力が消え失せ、神と人との関係が断たれ、戦うことも、悲しむこともなくなり、生きる屍になったのである。

このような絶対的危機状態の時に神が介入したのである。「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった」（三八・一）。嵐の中の主の声は、神の介入が「突然」、「一方的に」、「強引に」来たようにヨブには受け止められたであろう。それは

何を意味しているのであろうか。ここには、主の強権的態度だけではなく、むしろ主の配慮があったように見える。苦難の理由を明らかにしようと固執するヨブの心を、一旦主の側に向けさせる必要があったのである。

人は固執することで解決の道を塞いでしまう。多角的視野を失う。このような状況を打ち破ることで、主の一方的愛を表しているようだ。神の一方的働きによって神とヨブの出会いが起きた（三八・一）。そして、その時、ヨブが見たものは、神ご自身である。「今、この目であなたを仰ぎ見ます」（四二・五）は、神をわたしの神として経験することから深い崇敬の思いに満たされたとの信仰告白に至っている。自己への固執から解放されて、ヨブは主との実存的経験をしたと言える。

6　神と「真っすぐに」向き合う

神とヨブの関係についてもう一つ興味深い言葉が記されている。「お前たちは、わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語らなかった」（四二・七、八）とあるから、神はヨブと三人の友人たちの様子をずっと見守っていたのである。そして、神は三人の友人の一人エリファズに「お前とお前の二人の友人に対して怒っている」（四二・七）と言っている。これは、ヨブが不平不満を述べ、神を呪った時のことを指している。ここで疑問になるのは、どこにヨブが正しく語った根拠があるのかということである。いろいろの解釈がある。[40]「正しく」の一つの解釈は、ヨブが正しく神を理解して、神理解を語ったという解釈である。もう一つは「正しく」は「真っすぐ」という意味であるから、ヨブ自身が真実な気持ちを語ったという解釈である。ヨブは自分に対する神の不公平さ、神の無慈悲さを非難し、神を攻撃したが、それは自分が正当に扱われていないという不満があったからである。自分の不満を理解してもらうための手段として非難、攻撃があった。ヨブの態度を消極的に非難すべきではなく、むしろ、ヨブの不満が持つ意味を受け止める

べきだったのである。自分の不満をそのまま表現した点で、ヨブは自分の感情を「真っすぐに」神に訴えた。ヨブは神に怒り、悔しさを表現した。そのような態度、あるいは神との向き合い方が「真っすぐだ」と解釈できる。

このような解釈は、正直な感情を抑圧して表面的信仰者であるかのように装うのは、正しくないということになる。ヨブは神への正直な気持ちを表現した。それは神との「真っすぐ」な関係であった。ヨブは神の強権的とさえ思える態度を恐れて正直な気持ちを表現できない悔しさを「このように、人間ともいえないような者だが、わたしはなお、あの方に言い返したい。あの方と共に裁きの座に出ることができるなら、あの方とわたしの間を調停してくれる者、仲裁する者がいるなら、わたしの上からあの方の杖を取り払ってくれるものがあるなら、その時には、あの方の怒りに脅かされることなく、恐れることなくわたしは宣言するだろう。わたしは正当に扱われていない、と」（九・三二―三五）と述べている。「裁きの座」「調停してくれる者」「仲裁する者」とあるから、法廷が想定されている。ヨブは被告席にいる。法廷ではヨブの身分が守られ、発言する機会が保障されている。だから原告を恐れずに、自分の正直な気持ちを発言できると言う。ヨブは常に自分の感情に「真っすぐ」に語ることを求めた者である。ここにヨブが神から「ヨブは正しく語った」と受け入れられた理由があったと解釈できる。

ここには神と向き合う姿勢が「真っすぐ」であることの大切さがあると解釈できる。被災者が神はいないと感じたことを神に訴えることが、神との信頼関係を作る重要な要因である。私たちは思いがけない病を告知されたり、事故などで愛するものを奪われる災難に遭った時に、「神なんかいない」と言って神に背を向けて離れ去ろうとする。それが神に裏切られたと感じた時に示す反応である。ここには正しい神理解はないとしても、神への漠然とした期待があり、漠然とした関係があったと言える。この時、神に正直な感情を伝えることができれば神との自由な信頼関係を作ることができる。神との真の関係はこのような自由で率直で純粋な関係であるべきである。自分の本当の気持ちや感情を押し殺

して、無理やり「信仰」だからといって諦めることの誤りを教えているようである。つまり、ヨブ記は私たちが神と向き合う時の姿勢が「真っすぐ」であることの大切さを語っていると解釈できる。積極的に神に問いを投げかけ、組討ちする信仰姿勢の大切さを教えている。[41]

このことが意味するのは神への率直な気持ちを表現することの積極的価値である。信仰生活の中で起きる不条理な出来事に出会って不信に陥り、信仰が落ちていく時、神への否定的感情を表出することが重要だと解釈できる。積極的に神に向かって問いや感情を投げかけ、組討ちする信仰姿勢の大切さを教えている。

大災害が襲った時、手を差し出して助けてくださらなかった神に対して、被災の苦しみ、悲しみや神への怒りを「正直に」吐露してもよいと語っていると解釈できる。むしろ吐露することが神との新しい関係を築くために不可欠だと語っているように解釈できる。

7　傷ついた者を支え合う愛の共同体の必要性

以上述べたように、人生は常に破滅、喪失、死を内包していることをヨブ記は教える。不幸にも、被災した人が出た場合、その傷ついた人たちを慰め支えて一緒に生きるための思想が必要であるし、それを実現する制度が大切になる。労りや思いやりを中心にした共同社会を作るための思想が必要になる。また、政治・経済システムが変わる必要がある。競争を中心にした願望充足型競争社会は災難が襲ってきたときには人間同志が支え合うことができない。強者だけが生き残るのではなく、理由なく深い傷を負った被害者も一緒に生きることができる労りの社会を生み出していくことが必要である。

先に述べたように、応報思想は共同体に亀裂をもたらす原因になるが、共同体を創造し、築き上げる力にはならない。ヨブは三人の友人から非難された時、孤独の底から叫んだ。「どうか、わたしの言葉を聞いてくれ。聞いてもらうことがわたしの慰めなのだ。我慢して、わたしに話をさせてくれ」（二一・二―三b）と。ここでヨブは自分の訴えに耳を傾けてほしいと叫んでいる。これこそヨブが求めたもので、ヨブの心に安らぎを与え、生きる力を引き出すものだったのである。

癒しの共同体では、自然災害や不慮の事故で生命を失った人たちが、自分たちの共同体の一員としていつまでも想起されることが望ましい。無惨な死や悲劇的死を余儀なくされた人たちも、共同体の中でいつまでも想起される社会が癒しの共同体である。無惨にも亡くなった人を今に甦らせる思想が必要である。スピリチュアルな思考は亡くなった人たちを今に復活させるものである。スピリチュアルな思考は、人知を超える霊（スピリチュアルな）の世界を認めることであり、その世界では死者も生者も超越者の眼差しの中にある。超越者の世界を認めることですべての人が私たちの心に甦ってくる。それに加えて、死者は生者の人生物語の中で新たな意味を持って甦ってくるのである。

8　スピリチュアルな体験の重要さ

最後の部分は、「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった」（三八・一）とあり、神の呼びかけが、長々と語られて（四〇・二まで）ヨブが霊的覚醒を起こし、本当のヨブ自身の在り様に気づく場面である。「わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません」（四〇・四―五）。

主の嵐の中からの声を聞くことはヨブにとって非常にスピリチュアルな体験である。災難や苦難に向けられたヨブの目が真っすぐに神に向けられた瞬間である。視線が神に向けて開かれ、主との垂直的関係が生まれた瞬間である。[42] このスピリチュアルな体験は、ヨブが何者であるかを気づかせた。「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」（四二・五）のすぐ後、次のように続いている。「それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」（四二・六）とある。塵と灰の上に伏し、自己正当化を止めて自分の罪を認めて悔いている。自分の内にある自己正当化の罪の大きさに気づき神の前に遜って悔い改めた。

ヨブ記三八章はスピリチュアルな体験が突然来たように描いている。三二―三七章はエリフの言葉である。ヨブ記の記述からすればエリフの言葉の後は、ヨブの応答が来るはずである。その順序に従わずに、三八章からは突然主の介入記事になっている。スピリチュアルな体験は突然一方的に起こり、超越者の視点から自分を見つめさせてくれた。ヨブが主の声を聞くことで、古い自己の殻から出て、自分を見直すことができた。スピリチュアルな体験は危機で失った自己を取り戻す機会となる。それは、ヨブ自身の内のスピリチュアリティの覚醒による失った超越者との関係の回復がもたらしたものである。[43]

主の突然の介入が読者の予測を覆す形で起きたのは、人間の予測や常識を超えた形で神の介入があると解釈できる。このような意外性にスピリチュアルな体験があると言い得よう。「それでも神の介入がある」という希望を生む根拠でもある。

神の眼差しの中にヨブが新しい物語を紡ぎ出す出発点がそこにあった。ヨブ記の四二章は失ったものを再び与えられる祝福の物語である。この四二章はヨブの喪失の悲しみを背景にしながら新しい物語が始まったと語っている。この新しい物語は神の突然の介入から始まった。このようなスピリチュアルな体験は新しい物語を紡ぎ出すための出発点にな

る。危機で失った過去の物語ではなく、失ったものを含んだ新しい物語である。この新しい物語は、失ったものがいかに大きく、いかに掛け替えのないものであっても、「失ったもの」が新しい意味を持つ物語を生み出すものである。ヨブ記は神の介入を新しい物語を紡ぎ出すための視点を示そうとしたと解釈できる。スピリチュアルな体験はすべてのものを失った人に新しい物語を紡ぎ出す切っ掛けを与えてくれる。

六　結　び

三・一一の大地震、津波災害、原発事故で多くの方の生命と財産、仕事、生活の場が無惨に失われてしまった。四方八方想像を絶する壊滅状態である。その惨事を見た人の頭は空白になり、思考は停止し、言葉を失った。そして、神はどこにいたのかと人々は疑問に思った。ヨブも家族、家畜、雇い人、健康が奪われたと記されている。災難の明確な理由が見つからないという事実がヨブを一層苦しめた。

この拙論では牧会論的視点からヨブ記を読んできた。家、家畜、雇い人、家族、そして自分自身の健康を失ったヨブが経験した経験に集中して読み直した。すでに見たように、ヨブ記記者にも正しい人が災難に遭って苦しむ理由は見つからないままである。神が人を苦しめているわけでもなく、神が自然の猛威を止める権限もない。しかし、何故こんなことが自分の身に起きたのかと苦しむ人や、神なんていないと神を否定する人にも、不条理な出来事との向き合い方を語っている。ヨブ記は悲惨な現実を見ながら、悲惨な現状に向き合う力を与えようとしている。深く傷つき、希望を失った人間自身に語りかけている。ヨブ記の語る神は、人間の弱さや脆さを持つ人間に寄り添う神である。また、弱さ

を弱さと認めることから神との関係を作り出そうとしている。それは人間自身が自己の弱さを経験した時に起きる叫びの中で見出す神である。その時、神は痛む人の一番近くにいて、生きる力や希望を与えようとする神なのである。神こそ破滅の中での生きる希望だと語っている。

また、ヨブ記では災難や悲劇に遭って嘆き、悲しみ、怒るのは当然のことだと言っていると思われる。ヨブのように神に「地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」（一・八）と言われた人でも、自分の身に重なる悲劇が襲ってきた時、神に不平を言い、呪うのである。しかし、神は苦難にもがき苦しむヨブを見守り続け、不平、怒り、嘆き、批判を浴びせるヨブを神は見捨てなかった。むしろ、神自身が無条件に危機状況に飛び込んで来てくださる。

ヨブ記は災害に遭って嘆き悲しみ、生きることを放棄しようとする人に、神にもっと怒り、不平を言ってもよいと励ましている。そのことによって神との新しい信頼関係が生まれ、神と共に歩む人生が生まれるとヨブ記は示そうとしていると教えられる。

注

（1）この論文を執筆中、『福音と世界』（二〇一一年八月号、新教出版社）は「特集＝ヨブ記と神義論」を公刊した。そこには旧約学者、宗教哲学者、新約学者、宗教思想家が今回の震災との関係でヨブ記を論じている。

（2）G・グティエレスはペルーのリマで生まれたカトリックの神学者で主著『解放の神学』（岩波書店、二〇〇〇）は神学界に大きな影響を与えた。グティエレスは「ヨブ記の場合、不当な苦しみに翻弄される無垢の人々について神はこうした人々を愛しており、また自分自身のため、また他の人のために正義を求める正当な要求が無償性の支配する世界で十分かつ最優先されるべき緊急性を帯びるものだということである」と述べて、歴史的状況の中で苦しむ人の立場でヨブ記を読んでいる。G・グティエレス、山田経三訳『ヨブ記――神をめぐる論議と無垢の民の苦難』教文館、一九九〇年、八八頁。この翻訳本は英語版 *On Job: God-talk and the Suffering of the Innocent, Maryknoll*, 1987 版による。また、この翻訳の訳者あとがきに「ヨブ記を聖書学的に忠実に解明すると共に、ヨブの苦しみを現代世界において苦しんでいる人々との歴史的困窮と結びつけようとした」とある。この言葉は、歴史的状況の中で聖書を読むという立場を示している。それは震災の被災者の立場から聖書がどのような慰めや希望を与えられるかという問題であり、歴史状況の中で聖書の価値を問うことになる。

（3）大洪水（創世記六―八章）、国家崩壊（バビロン捕囚、エゼキエル書、イザヤ書など）、斬首（マルコ六・一六―二八）、パウロ逮捕（使徒言行録一六・二〇―二四）など、その他多数。

（4）危機とは、「分ける」が原義。英語 crisis の原義は、分ける、分かれ目。この意味から裂ける、自己が引き裂かれる崩壊、破滅、分断、分裂、自己喪失などの意味が生まれる。

（5）アブラハム・J・ヘッシェルは「この世の視座から読めば、ヨブ記のテーマは神義論、すなわちこの世に悪が存在しているのにどうして神の義を立証できるか、という問題である。他方天の視座から読めば人義論、すなわち悪が存在しているのにどうして人間存在を肯定することができるかという問題がテーマとなる」Abraham J. Heschel, *God in Search of Man: A Philosophy of Judaism.* 邦訳は、森泉弘次訳『人間を探し求める神――ユダヤ教の哲学』教文館、一九九八年、四七七頁。

（6）この箇所は、イエスが見た人々の生活の様子が描かれている。民は病気や患いを負い生活の目標を失い、心身霊ともに弱り果て、打ちひしがれていた。イエスは民の中に身を置いて民の生活の苦しみを感じた。それは神の創造した人間の姿から遠く離れていた。

ここには痛む人を他人が体験できるかという疑問がある。被災者の傷の深さは当事者にしか分かり得ないことを謙遜に認め、できる限り被災者の傷を理解することが必要である。イエス自身が人々の打ちひしがれた様子を見て心を痛めたことが牧会論的視点の原点になっている。

(7) 和田幹男によれば、テキスト解読が困難で本文決定に難渋する部分があると述べている。和田和男『新共同訳旧約聖書注解「ヨブ記―エゼキエル書』教文館、二二―二三頁を参照。

(8) 和田幹男、同書、二四―二五頁。民話はヨブ記で採用された古代メソポタミヤにあったものである。しかし、研究者によれば、これに類する民話は他にも存在していたという。

(9) 詩文の三人の友人たちとヨブの議論について、永見勇はヨブと友人たちの対話でのテーマはヨブの苦難は何故起きたのかであったが、ヨブ記の中では解答は出されていないという。このテーマは神秘であった「詮索すべきでない」という立場を取ってきたと述べている。永見勇「キリスト教とヨブ記」『福音と世界』特集＝ヨブ記と神義論、二〇一一年八月号、新教出版社、三二―三三頁。

(10) 和田幹男、前掲書、二五頁。

(11) 並木浩一は「ヨブ記」の書かれた歴史的状況について神殿と律法を中心とするユダヤ正統主義の確立によって、既存の解答で満足することに危惧を持つ知識人によって書かれたと述べている。並木浩一「ヨブ記からの呼びかけ」『福音と世界』二〇一一年八月号、新教出版社、二五―二七頁。

(12) 並木浩一は「完全でまっすぐであり、神を畏れ、悪を遠ざけていた」と訳出。並木浩一、勝村弘也訳『ヨブ記　箴言』旧約聖書XII、岩波書店、二〇〇四年、三頁。並木は「完全」とは「信仰と倫理において非難の余地なく努力する姿勢が完全であること」と解釈している。

(13) J・G・ジャンセンは、ヨブの敬虔は神の祝福の結果かどうかをヨブ記は問うていると述べて、次のように記している。「世界の創造者にして人類への施恵者なる神は人間に対して垂れる恩恵によってのみ崇められるに足るのか」。J. Gerald Janzen, *Job: Interpretation, A Bible Commentary for Teaching and Preaching*, Atlanta, John Knox Press, 1985. 邦訳は、飯謙訳『ヨブ記』現代聖書注解、日本基督教団出版局、一九八九年、七五頁、二三頁。

(14) 「ほうっておいてください」には、神から関わられることへのうっとうしさが表現されている。また、繰り返し訴えたことが無駄だったという神への失望と諦めが読み取れる。ヨブは神との関係を断って孤独の底に落ちることを願っているように見える。

(15) 翻訳によって表現が異なっている。例えば、並木浩一訳『ヨブ記』（岩波書店）では、必ずしも言葉として表現されていな

いが、前後の文脈から「決してない」の意味が汲み取れる訳になっている。

(16) 自分の最も信頼するものから見放されて全く孤立化すると、人は妄想に逃げ込むか、あるいは、意固地に自己主張して自己を保とうとするしかない。ヨブの断末魔の叫び「……したことは、決してない」にはヨブの叫びに応えてくださらない神に絶望し、存在を支える土台を失って、意固地に自己正当化するヨブの姿が顕著になっている。

(17) 無実な人、正しい人は決して滅ぼされない。因果応報思想。

(18) 子供が犯した罪の結果、親が罰を負うという因果応報思想。

(19) 神は悪を裁かれる神である。ここにも因果応報思想がある。神の前に悪を隠せない。すべての悪を神は見通していて裁かれる。しかし、悔い改めれば、神の前に祝福を得られる。それが賢い生き方だ。

(20) 神に悔い改めないヨブは傲慢だと裁く。神の言葉を無視して自分の欲望を満たした結果は、破滅が待っているだけだとの意味。

(21) サタンについては、浅野順一『ヨブ記』、二七一頁を参照。

(22) 「お前のいいようにするがよい」とは、サタンの気持ちが済むようにしてもよいと解釈できる。ここにいくつかの疑問がある。神は何故サタンの気持ちを満足させようとしたのであろうか。サタンはヨブが神に従順であることに不満だったのか。そして、ヨブは従順に見えるけれども、ご利益信仰だということを証明したかったのか。すなわち、サタンはヨブの信仰の本体を暴きたいと考えたのであろうか。実は、サタンは神に従順な人を神から引き離すことを喜びとしたように描かれている。「ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません」(一・一一)と述べて、ヨブが神を呪うようになることを願っている。「呪う」とは、真正面から対立して恨むことを言うから、神とヨブを引き離すことが意図されている。また、「お前は理由もなく、わたしを唆して彼を破滅させようとした」(二・三)とある。ここにもサタンの悪意が見える。RSVではYou moved me against him, to destroy him without cause.(お前はヨブと私を対立させて、理由なくヨブを破滅させようとした)。RSVはサタンの魂胆はヨブと神とを敵対させることにあったように訳している。

(23) 八木誠一は「カミサマはヨブに絶対の信頼を置いているから悪事を許したのだろうか。『そんなテストの必要など全くない』とサタンの教唆をつっぱねるのが本当の知と信頼であろう」と述べて、カミサマの態度に疑問を投げかけている。八木誠

一「宇宙の神と人間の道」『福音と世界』二〇一一年八月号、四一頁。

(24) 浅野順一は「賭け」と解釈している。『新聖書大辞典』キリスト新聞社、一九七一年、一四六八―一四七三頁。またG・グティエレス、前掲書、三九頁。

(25) 「平穏な生活をしていたわたしを神は打ち砕き」、と記して神と悪者が結託して私を徹底的に打ち砕いてしまった。信頼していた神は私の見方ではなく、悪者の側に立って私を苦しめると嘆く。

(26) サタンの言葉「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか」(一・九)は、ヨブの信仰は御利益信仰だとの指摘と解釈できる。ここには神がヨブを誉めたことに対するサタンの嫉妬が見える。ヨブを嫉妬しての嫌がらせが見える。

(27) 並木浩一、前掲書「ヨブ記からの呼びかけ」、二八頁。

(28) 和田幹男、前掲書、二八頁。「古代オリエントには最高神を中心に神々が天上の法廷に集って会議を開き、地上で何か計画を実行するための重大な決定が行なわれるという考えがあった」という。

(29) 将来、地震予知学が進歩し、地震発生のメカニズムが明らかにされて、災害予防に大きく貢献するだろう。しかし、地震予防学がどんなに進歩しても地震を完全に止めることは不可能である。その意味で人間は地震や津波の危険にさらされている。

(30) 東日本大震災や津波がもたらした被害はあまりにも大きく私たちには安易に受入れられない。聖書の神は全知全能で、山をも動かし、海をも分け、嵐を司ると教えている。この聖書理解に立つと、神に忠実な人には、神は被害を免れさせてくださると理解できる。しかし、今回の大震災はこの理解とは合致しない。この矛盾にどう答えればよいのであろうか。並木浩一も八木誠一も今回の地震と津波については見解を共有している。並木は今回の震災は人間の外部世界のことであり、自然界には「自然界の秩序と自律性」があると言う。並木、前掲「ヨブ記からの呼びかけ」、二九頁。八木は「自然は人間のためではなく、自然自身の秩序にしたがって動く」と言っている。八木誠一、前掲書、四三頁。並木も八木もこのような自然界のリズム(並木)、自然の秩序(八木)を認めつつ、自分たちの生活を築くべきだと語っている。聖書は苦難の原因の追求よりもむしろ、現状をいかに生きるかに関心が寄せられているように見える。災害の原因追及にはあまり関心がない。それは、大震災の原因は、神の権限外にあることを暗に示唆しているようである。聖書は、苦難を負った人に生きる力や希望を与えることに強い関心を持っている。

(31) Ｉコリント一三・一二には「わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知るようになる」とある。この聖書からすると、今、苦難や被災の理由は分からないかもしれないが後で分かるようになるとの意味になる。実は、ヨブ記の最初には、神とサタンの話し合いが天上で行われた結果のことになっている。このことは、私たちには苦難の理由は分からないことだとも言っていると解釈できる。

(32) 因果応報は、原因と結果が関係しているので、私たちの生活全般に深く根付いている考え方である。不幸な事が起きるとその原因がどこかにあるはずだと決めて探し求める。原因が見つかると二度と失敗しないように注意する。因果応報という秩序があることで人の生活は混乱を避けることができる。このような考え方が定着すると、悪い事が起きると原因が必ずあるはずだと決めて、原因探しをし始める。ヨブの苦難はヨブ自身の罪か子供たちの罪かのどちらかに原因があると、友人たちは主張したのである。

(33) ヨブは「わたしが過ちを犯したのが事実だとしても、その過ちはわたし個人にとどまるのみだ」（一九・四）と述べている。ここには応報思想が表現されているから、ヨブ自身もこの思想に全く染まっていなかったとは言えない。

(34) 例えば、ヨブ記五・八「わたしなら、神に訴え、神にわたしの問題を任せるだろう」と述べて、ヨブを非難している。注目すべき点は「わたしなら」と言って、ヨブとの差別化をしている点である。このような差別化が共同体の亀裂を生む原因になる。

(35) 例えばヨブ記八・三ｂ―四「全能者が正義を曲げられるだろうか。あなたの子らが神に対して過ちを犯したからこそ、彼らをその罪の手にゆだねられたのだ」と述べている。

(36) ヨハネ福音書九・一―三。生まれつき盲人の記事がある。弟子たちの質問は苦難の原因追及であったが、イエスはその質問には直接答えていない。イエスは盲人が神の栄光のために生かされているという現状肯定と、盲人には使命があると明確に示している。

(37) 四二・五の『新共同訳聖書』には主語「わたし」（ヨブ自身）が訳出されていない。口語訳聖書は「わたしはあなたの事を耳で聞いていたましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします」と訳出している。ここでは主語「わたし」と目的語「あなた」が明確にされることは重要である。並木は「そうです。私はあなたのことを片耳で聞いていました。しかし今、私の目はあなたをみました」と訳出。「あなたを見ました」という言葉にコメントを加えている。「ヨブが顕現し、彼

と水平の位置に立って彼に語りかけたこと、彼の目が神の統治とその不思議に対して聞かれたこと、それにより思いがけない地平の広がりが可能になったこと、ヨブの問いに対する答えの基盤が与えられたことを意味している」と。『ヨブ記箴言』、一七〇頁。RSVでは、“I have heard of thee by the hearing of the ear, but now my eye sees thee.”となっている。つまり、私は今まではあなたのことを耳で聞いていたが、今、私の目であなたを見ています。主語を訳出することで、主語は強調され、ヨブ自身の主体性が明確化される。ボスはここをヨブは先には神について聞いて知っていたが、今、新しく神を知ったかのように受け止めたと書いている。Jeffrey Boss, *Human Consciousness of God in the Book of Job: A Theological and Psychological Commentary*, Continuum, 2010, p. 213. 更に、神がヨブのところに降りて来たのは、議論するためではなく、ヨブのそばに寄り添うためであると書いている。

(38) 左近淑は三一・三五―三七について次のように書いている。「ヨブ記四―三一章全体の必然的到着点である」と。その理由にここには「人間的には異常なまでに例外的な完璧な義人がいる」とし、超人化し、人神化する人間の最大の罪があると指摘している。そして法廷に立って、ヨブは畏れなく赦しを乞うこともなかったと書いている。左近淑『左近淑著作集別巻　聖句研究』教文館、一九九八年、二一八頁。

(39) 口語訳聖書は「ヨブの言葉は終った」と訳出。

(40) 「わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語る」の解釈については研究者の解釈が異なっている。Y・ピエオンは、正義は時代や社会状況によって変化するものだということをヨブ記は語ったと述べている。三人の友人たちは時代や社会状況の変化があったにもかかわらず、昔の教えに固執していた。ヨブは新しい状況に敏感、かつ置かれた状況をすばやく感じ取って、その中で神を理解した。ヨブが「正しく語った」というのは、このような態度が正しかったと評価されたのだと主張している。Yohan Pyeon, “You have not spoken what is right about me: Intertexuality in the Book of Job,” Bell and Howell Information and Learning Company, 2000, pp.277-280. Claremont Graduate University に提出された博士論文。A・ワイザーは「ヨブの苦難を神の罰だとする友人たちの見解が最後にはやはり正しかったとするような誤解を防ぐためのものであるから、これは対話の仕上げとして特に必要不可欠であることが分かる」と述べている。Artur Weiser, *Das Buch Hiob*, Vandenhoeck and Ruprecht, 1974. 邦訳は、松田伊作訳『ヨブ記――私訳と註解』ATD・NTD聖書註解刊行会、一九八二年、一八〇―一八一頁。並木浩一は「正しく」の原典「ネコーナー」は正しいことと翻訳することが、原文によ

り正確であると主張。ここでは語り方のHowを問題としているのではなく、何Whatの問題であると述べている。並木浩一『ヨブ記』岩波書店、二二四頁、一七一―一七二頁。また、並木浩一『ヨブ記論集成』教文館、二〇〇三年、二一六―二三九頁が参考になる。J・E・ハートレーは「ヨブは懸命に真理を求めたのに、友人たちは誤った神弁護を繰り返した。その結果ヨブを慰められなかっただけではなく、ヨブを苦悩から解放できずかえって苦しめた。友人たちはヨブが神への真の礼拝をするのを妨げたので、その愚しさのゆえに非難されたのである」と述べている。John E. Hartley, *The Book of JOB*, William B. Eerdmans Publishing Company, 1988, p.539. A・ファン・セルムスは「みずから神への反抗の時期をすごし、神によってわれわれにさしむけられる生の命運というものを知った者だけが、感謝にみちた驚きとともにこの奇蹟を喜ぶことができるのだ。神と言い争い、人間と言い争う神の僕ヨブこそが、神について正当に語ったのだと」と述べている。A.Van Selms, *JOB*, Uitgevermaatschappij, J. H. Kok, 1984. 邦訳は、登家勝也訳『ヨブ記』教文館、二〇〇二年、二二頁。キャロル・A・ニューサンはヨブは「正しく」語ったから褒められたのではなく、ヨブ記記者が全体の流れを明るさへ引き戻すために書いたものだという。Carol A. Newsom, *The Book of Job*, The New Interpreter's Bible, Vol. IV, Abingdon Press, p.634.

(41) 創世記三二・二三―三二にヤボクの渡しでヤコブが天使と闘って勝った記事がある。マタイによる福音書七・七―九には、求めよ、捜せ、門をたたけ、とすすめている。ルカによる福音書一八・一―五には、神を畏れない裁判官でも求め続けるので有利な裁判を下したとある。

(42) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、二〇〇四年、四七頁。

(43) 使徒言行録の記事を想起させる。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ」（使徒言行録二・二）。